

大地の周囲の田んぼは鏡のように光り、そこに小さな緑色の稲の赤ちゃんが芽生えている光景が広がる大地です。合わせて、カエルの合唱も毎晩大盛況です。緑が深まり、気持ちが落ち着き、凜とする季節になりました。予想もしなかったインフルエンザが広がり、大地だけではなく、あちこちの幼稚園や学校も体調を崩す子どもたちが多かったと聞きましたが、どうにか落ち着いて、これからの季節を思い切り楽しんですごしてもらいたいと思います。病气やけなどは、科学的には流行や伝染性によっておこりますが、霊的には、バランスの崩れや何か気づかせてくれる機会として起こると考えます。(私は、霊的要因がかなりのウェイトを持っていると、自分の家族の場合は考えています)病气やけがは、自分自身の休養のタイミングかもしれないし、また、その人自身に対して、気持ちやエネルギーを向けて、人間集団のバランスを調整するためもあるかもしれません。病气をしたことにより、人生が変わった、気づきがあった という話はよく聞くことです。

美しい新緑の季節を迎え、これに雨が元気を与え、輝かせる季節がやってきます。子どもたちも、十分なエネルギーを自然から受け取り、そしてファンタジックな世界から豊かな想像力を得て、これからの梅雨の季節を楽しんでいきたいと思っています。

【タイミング】

先日の新聞に、73歳で2回目のエベレスト登頂に成功した渡辺さんという女性の記事、同じく、同日の新聞で、8000m 峰を全制覇した日本人の記事を読みました。そして、偶然、田部井淳子さんの講演会を知り、講演会の2時間前に電話して、講演会場所に駆けつけ、キャンセル待ちで入れてもらいました。更に、エベレスト2回目の探索中の長男から無事下山したという連絡。2日間にうちに、これらのことがすべてつながって起こったタイミング。この2日間は、エベレストで埋め尽くされた感じです。田部井淳子さんの講演会の質疑応答で、その35年前の「登頂した瞬間の気持ちはどんなものでしたか」と質問させていただきました。「これで終わった、さあ、どうやってすぐに戻ろうか」ということでした。そういえば、長男のアコンカグア登頂ブログでもその瞬間には「頂上に立った実感はない。ただ、これで終わったのだと感じたことは鮮明に覚えている。」とありました。



また、野口健さんの本に、8000m を超えると、そこは別の世界で、過去の登山者の遺体が転がっている中を進むので(遺体回収不能であるため)、登山者は錯乱して飛びこんだり、身を投げたりすることもあると書いてありましたが冒頭の渡辺さんも「岩場は険しく、過去の登山者の遺体が横たわっていた」と言っていました。この渡辺さんは、過去に腰に大けがをしても奇跡的にリハビリをして回復し、田部井さんは、乳がんから回復し、8000m 全制覇の男性は、雪崩で背骨を折り瀕死の重傷から奇跡的に生還し回復したという皆、共通の困難を乗り越えてきたということです。

この精神力の源は、何なのだろう、特に、幼少期はどのように過ごしたのだろう、ということが、私の仕事柄、とても興味のあることでした。渡辺さんの記事には「薪を取りに行ったり、家畜のエサとなる草を刈りに行ったり、山歩きは日常のことであった」と語っていました。田部井さんの本を読んでみると、いろいろ書いてありましたが、興味深かったのは、女子大に入り、寮生活で、胃を壊して療養するほど、その寮生活が厳しく大変だったことも、その精神力を養えたと書いてありました。精神力は、楽しいことばかりでは育たないという単純な原理そのものでした。さらに共通なことは「自分や時間を忘れて、のめりこむこと、大好きなことに夢中になる時間と世界をずっと持ってきたことでした」まさにこれこそ「フロー原理」だと思います。「夢中になって、我を忘れて、何かに取り組んでいる状態」がフローです。そして「遊びや趣味に没頭しているときには、人はフローに入る」のです。子ども時代に、どれだけフロー状態(やらされる・外部からの強制ではなく)を体験したかが、その後の集中力や生きる力を養うのだと思います。

さて、更にタイミングといえば、先日ののはな祭で、久しぶりに皆様の前に顔をだした、長女のののか。3月末に、京都へ自転車、故郷を後にして修行へ出かけました。ご存じのように、働き口も就職口も決まらないまま、とにかく徹底的に厳しい所で、料理を修行してくると言ってお出かけ、あちこちの老舗の料理屋に食べに行っただけ、働かせて下さいと頼んだり、短期のバイトに行ったりしながらも、芳しい成果もなく、過ごしていたらしいのですが、ある時、前から気になっていたパン屋で、正社員を募集しているという情報を得て、これに応募するという連絡を受けました。日本料理の修行に行ったのに、パン屋と思いましたが、娘が応募したいと言うには、かなり面白い所に違いないと思い、調べてみるとなるほどでした。試験は、好きな作文を書いて持ってくるように言うので、彼女は「最後の晩餐に何を食べるか」テーマにして「それはリング」だという趣旨を書いたようです。「絶対、おじいちゃんに見せたい」と言っておりましたが、内容は次回持ってくるみたいでしたが、わが娘ながら、とても面白い奴なので、今までの運とタイミングから言って、たぶん採用されるだろうと思っておりましたが、見事、採用が決まりました。

そこで、引っ越しを本格的にするために、先日帰って来たのですが、さすがにドラマはこれで終わりませんでした。文庫祭りの朝に、留守電に、以前、食べに行っていた有名な割烹料理屋から連絡が入ったということ。そこでは、料理を食べるために、電話予約をした時、自分の電話番号を言っただけで、履歴書とか連絡先は伝えてきていないし、ただ、ここで働きたいと漏らしただけで、その後は1か月半、そのまま過ぎて、彼女の脳裏からはすっかり消えていたのです。しかも、パン屋への就職が決まったこのタイミングに連絡がくるなんて。もちろん、留守電の内容は、6月末に、社員が辞めるので、採用したいという内容でした。既に決まった就職口を断ることは信義やルールに反するし、料理屋も魅力的だし、このタイミングのずれに悩んでいましたが、すべて正直に話し、自分の心に素直に忠実に向かい合おうとアドバイスしました。

実は、3月上旬に、東京都内の超有名割烹料理屋(ミシュランの最高の☆)に採用が決まり、家族全員喜んだことがあったのですが、これも幻に。社員が突然連絡ないままに辞めて消えてしまったので、娘を採用するという連絡があり、喜んだのも束の間、その社員が突然戻ってきたというドラマがあったのです。親としては、放射能の問題で、東京行は、渋っていたので安心しましたが。

翌日、娘は、その料理屋へランチを食べに行き(娘は自分の舌と眼で、料理やお店のスタッフや雰囲気をも自分で納得するまで必ず食べに行く、おおよそ5000円から10000円あたりの料理を食べるらしい)主人と話してきたらしい。その結果、娘はパン屋を選択しました。信義やルールを考慮したのではなく、素直の料理屋の主人にパン屋へ行くと伝えたらしい。その主人曰く「自分の見た眼は正しかった。初めて店に来て話した時、この子は何か持っていると思い、気にかかっていたので、すぐに思い出して声をかけてみた。やはり、自分の直感は正しかった。そんな自分とあなたに会えたことは嬉しい。いつでも相談に来な」と。やはり、一流はすごいと、異口同音に感動した青山家でした。